

近世
北前船



中世
十三湊

青森浪漫 時を超えた悠久の旅

奥津軽 歴史探訪

OKUTSUGARU
HISTORY GUIDE



縄文
亀ヶ岡



行くたび、
あたらしい。
青森

青森浪漫

おくつがる
奥津軽と称される青森県西北部(五所川原市、つがる市、^{あじがさわまち} 鱒ヶ沢町、^{ふかうら} 深浦町、^{いたやなぎまち} 板柳町、^{つるたまち} 鶴田町、^{なかどまりまち} 中泊町)には、いにしへの時代、北の地から全国へ影響を及ぼした歴史があり、その遺産が今もなお数多く残されています。

この全国に誇れる貴重な遺産の歴史を紐解き、先人の^{そくせき}足跡を辿ることができるよう「奥津軽歴史探訪」として広く紹介することで、この地を訪れる方々を時を超えた悠久の旅へと^{いざ}誘います。

◎目次

巻頭エッセイ「奥津軽の旅人」森沢明夫	4
奥津軽歴史探訪MAP	8
つがる市「亀ヶ岡」～縄文～	10
五所川原市「十三湊」～中世～	16
鱒ヶ沢町・深浦町「北前船」～近世～	24
奥津軽歴史玉手箱	32
奥津軽歴史探訪おすすめモデルコース案内	37
歴史と一緒に楽しみたい！便利情報	41
奥津軽歴史探訪宿泊情報	46



— 巻頭エッセイ —

奥津軽の旅人

◎ 森沢明夫

ある雑誌の連載で「渚の旅人」という紀行エッセイを書いてきた時期がある。七年間という永い月日を費やして日本の海岸線をすべて一本の線でつなぐという、なんとも壮大かつ痛快な企画だった。

その旅でぼくは、日本の渚ならではの美しい自然風景に心を動かされ、土地の人々の暮らしや文化に触れ、そして幾多の歴史と出会ってきた。

結果、日本という国の見方がおおいに変わったのだから、いま思い返してみても、その旅はじつに有意義な人生経験であった。

七年もかけた「渚の旅」だけに、思い出を数え挙げれば切りがないけれど、しかし青森県北西部の海岸線は、とくべつに印象深い地域としてぼくの胸に刻まれている。

理由は、単純だ。

そこには、清々しい海風とともに、遙かな「歴史の風」が吹いていたからである。



安藤氏まつわる宗教施設跡がある日吉神社



遮光器土偶レプリカ(つがる市縄文住居展示資料館(カルコ)内)



行合崎

旅人だったぼくは、眼前に展開する現実の世界を生身で味わいながら、同時に遠い過去へと「想い」を馳せる醍醐味を味わえたのだ。

現実の世界と、妄想の世界。生身の感覚と、意識の感覚。見えるものと、見えないもの。肉体と精神。そして現在と過去——。そんな二重構造の旅をすることで、旅先の時空を二倍楽しめたのである。

例えば、津軽半島北部の十三湖を擁する五所川原市市浦地区。この辺り旅するならば、鎌倉から室町時代前期にかけて栄えた港湾周辺の遺跡——「十三湊遺跡」を想いながら歩きたい。津軽の豪族・安藤氏が栄華を極めていたその中世の港湾都市からは、領主館と町屋を土塁で隔てていた痕跡や、宗教施設、中軸街路などが見つかっているという。そんな情報だけでも十分に妄想が楽しめそうである。

少し南下して、つがる市に入ると、今度は一気に時代を遡って縄文の風が吹く。有名な亀ヶ岡遺跡で出土した遮光器土偶——これほどぼくの妄想をかき立てるものはない。実はいま、ぼくは小説「津軽百年食堂」「青森ドロップキッカーズ」に続く、青森シリーズ第三弾となる小説のプロット作成に取りかかっている。そして、その物語の舞台を縄文時代に設定しているの

だ。人々がほとんど争わなかったと言われる縄文の風景を妄想しながら、ほっこり平和な気分で現在を旅するのも悪くないだろう。

さらに南下すると、江戸時代に津軽藩の御用港として栄えた鱈ヶ沢や深浦といった地域に入る。この辺りは言わずと知れた北前船の寄港地である。当時の廻船問屋がどれほどの財を成し、湊がどんなに賑わっていたかは、現在の資料館や博物館を訪ればよくわかるはずだ。

もしもいま、ぼくが再びこの地を旅するならば、終着点を深浦の行合崎に設定するだろう。なにしろ行合崎は、ぼくのなかで「日本一美しい岬」なのだ。

そんな行合崎の先端で、海風に吹かれながら、紺碧の日本海を見下ろす。そして、静かに目を閉じるのだ。そうすればきつと「歴史の風」がすうっと吹きはじめ、やがてぼくのまぶたの裏側には、海原を悠々と行き交う北前船が見えてくるに違いないのである。

(2010年 秋 執筆)

森沢 明夫／もりさわ あきお

一九六九年千葉県生まれ。早稲田大学人間科学部卒業。出版社勤務を経て、作家に『津軽百年食堂』(2009年) 小学館 など多数。

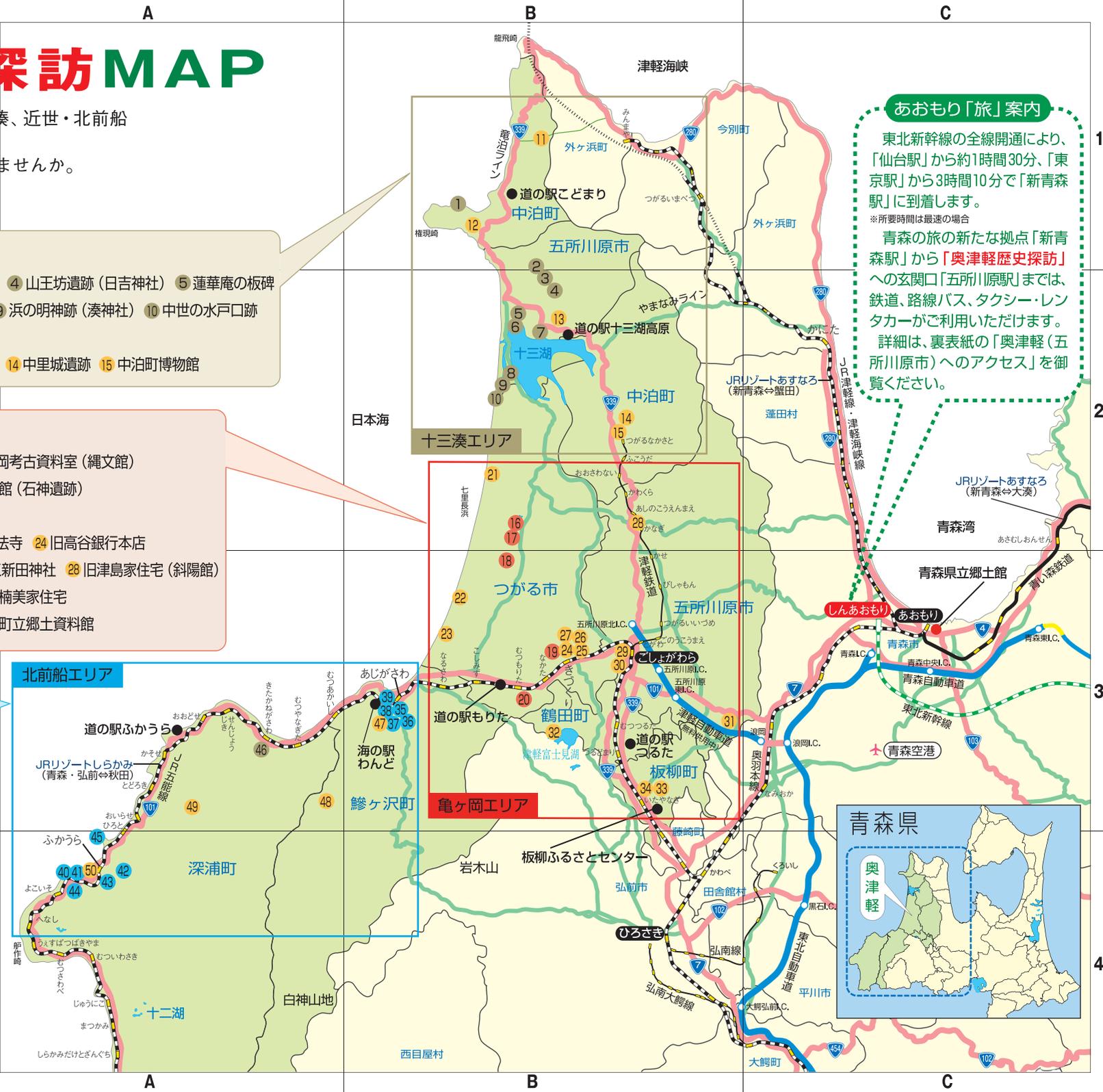
奥津軽歴史探訪MAP

奥津軽エリアは、縄文・亀ヶ岡、中世・十三湊、近世・北前船の歴史遺産など見どころたっぷり！
歴史の風を感じながら、じっくりと巡ってみませんか。

- 中世・十三湊 (P 16～)**
- ① 柴崎城跡 ② 唐川城跡 ③ 龍興寺跡(春日内観音堂) ④ 山王坊遺跡(日吉神社) ⑤ 蓮華庵の板碑
 - ⑥ 市浦歴史民俗資料館 ⑦ 福島城跡 ⑧ 十三湊遺跡 ⑨ 浜の明神跡(湊神社) ⑩ 中世の水戸口跡
- その他 (P 32～)**
- ⑪ みちのく松陰道 ⑫ 徐福の里公園 ⑬ オセドウ貝塚 ⑭ 中里城遺跡 ⑮ 中泊町博物館

- 縄文・亀ヶ岡 (P 10～)**
- ⑬ 田小屋野貝塚 ⑭ 亀ヶ岡石器時代遺跡 ⑮ 木造亀ヶ岡考古資料室(縄文館)
 - ⑯ 縄文住居展示資料館(カルコ) ⑰ 森田歴史民俗資料館(石神遺跡)
- その他 (P 32～)**
- ⑱ 高山稲荷神社 ⑲ 最終氷期埋没林 ⑳ 西の高野山弘法寺 ㉑ 旧高谷銀行本店
 - ㉒ 旧制木造中学校講堂 ㉓ 木作御飯屋・代官所跡 ㉔ 三新田神社 ㉕ 旧津島家住宅(斜陽館)
 - ㉖ 商都五所川原歴史館「布嘉屋」 ㉗ 旧平山家住宅 ㉘ 楠美家住宅
 - ㉙ 廻堰大溜池(津軽富士見湖) ㉚ 深味八幡宮 ㉛ 板柳町立郷土資料館

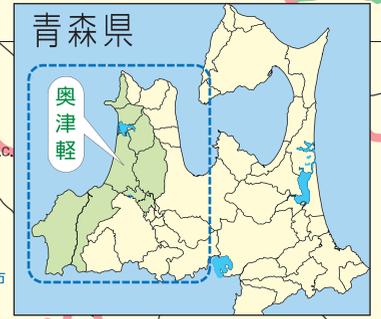
- 近世・北前船 (P 24～)**
- ⑳ 白八幡宮 ㉑ 願行寺 ㉒ 来生寺
 - ㉓ 天童山公園 ㉔ 鯨ヶ沢町奉行所・御飯屋跡
 - ㉕ 春光山円覚寺 ㉖ 風侍ち館
 - ㉗ 深浦町奉行所・御飯屋跡
 - ㉘ 神明宮トヨの名水 ㉙ 日和見山 ㉚ 行合崎
- 中世・十三湊**
- ㉛ 関の古碑群 (P 18)
- その他 (P 32～)**
- ㉜ 高沢寺庭園(瀧廣園) ㉝ 種里城跡
 - ㉞ 見入山観音堂
 - ㉟ 深浦町歴史民俗資料館・美術館



あomor「旅」案内

東北新幹線の全線開通により、「仙台駅」から約1時間30分、「東京駅」から3時間10分で「新青森駅」に到着します。
※所要時間は最速の場合

青森の旅の新たな拠点「新青森駅」から「奥津軽歴史探訪」への玄関口「五所川原駅」までは、鉄道、路線バス、タクシー・レンタカーがご利用いただけます。
詳細は、裏表紙の「奥津軽(五所川原市)へのアクセス」を御覧ください。



縄文 亀ヶ岡

縄文晩期を
代表する
未知なる
遺跡
つがる市

はるか縄文時代。
私たちの祖先が生活を営んだ場所。
遺跡を通して
縄文びとの暮らしを知り
現代につながる知恵を伺う…。
縄文を知る旅は
心を豊かにする
発見の一日に違いありません。

〈お問い合わせ〉
つがる市観光協会
(つがる市役所商工観光課内)
TEL/0173-42-2111(代表)



かめがおか
■史跡 亀ヶ岡石器時代遺跡(しゃこちゃん広場)



たごやの
■史跡 田小屋野貝塚



まづくり
■つがる市木造亀ヶ岡考古資料室(縄文館内)



■つがる市縄文住居展示資料館(カルコ)



■つがる市森田歴史民俗資料館

馬琴も魅せられた 亀ヶ岡の造形美

亀ヶ岡遺跡は江戸時代から存在を知られており、出土品はその造形美から珍重され、国内はもとより海を渡ってオランダにまで渡ったという。『南総里見八犬伝』の作者・滝沢馬琴も「亀ヶ岡物」に魅了されたひとりで、文人たちの会合「耽奇会（たんきかい）」で土偶や土器などを持ち寄って品評会を催したという。



耽奇会の記録集「耽奇漫録」収録、亀ヶ岡出土土器の図



2009年に行われた亀ヶ岡遺跡現地説明会



亀ヶ岡遺跡出土の彩文鉢形土器（青森県重宝 個人蔵）

亀ヶ岡文化発祥地 —— 亀ヶ岡遺跡

豊富な円筒土器が出土した石神遺跡など、数多くの貴重な遺跡が眠っている。この地を訪れる者は、今なお地中の奥底から響く縄文の力強い鼓動を感じずにはいられないだろう。

亀ヶ岡石器時代遺跡は、縄文時代晩期（約三〇〇〇〜二三〇〇年前）の集落遺跡である。出土した土器、土偶などは縄文時代の集大成といえる技術と英知を示しており、その様式は北海道から東北地方を中心に広く日本列島全体に影響を与えた。北日本の縄文晩期の文化のことを「亀ヶ岡文化」と呼ぶゆえである。

低湿地からは遮光器土偶や赤彩された土器や漆器など、当時の高い技術を窺わせる遺物が多く出土しており、丘陵部からは土坑墓や住居跡も見つかっている。その重要性が

海を越えた交易 —— 田小屋野貝塚

田小屋野貝塚は亀ヶ岡遺跡のすぐ北に位置しているが、時代はさらに遡り縄文時代前期中頃から中期（約五五〇〇年〜四〇〇〇年前）のものであるとされる。日本海側、それも内陸に位置する貝塚は非常に珍しい。

住まいである竪穴住居の跡をはじめ、円筒土器や石器と



田小屋野貝塚出土の貝製品など（青森県立郷土館所蔵）



亀ヶ岡遺跡の場所にあるしゃごちゃん広場

縄文浪漫の 眠る場所

縄文時代という田野山を駆けまわるような素朴な人々の生活をイメージしがちであるが、実際にはきちんとした定住集落に住み、優れた造形品に象徴される高い精神性を有する成熟した人々の社会が形成されていた時代であった。

つがる市には有名な遮光器土偶が出土したことで知られる亀ヶ岡遺跡をはじめ、日本海側では数少ない貝塚を有する集落遺跡、田小屋野貝塚、



亀ヶ岡遺跡出土の赤彩土器（青森県立郷土館所蔵）

謎を秘めた縄文の里を歩く



カルコに展示されている遮光器土偶の複製品



■つがる市縄文住居展示資料館 (カルコ)

館内に復原された竪穴住居の中から縄文人の
人形が古代の言葉で話しかけてくる。展示物
は亀ヶ岡遺跡からの出土品などで構成。

【開館時間】9時～16時
※休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始
【入館料】200円
【所在地】青森県つがる市木造若緑59-1
【問合せ】TEL0173 (42) 6490



■つがる市木造亀ヶ岡考 古資料室 (縄文館内)

亀ヶ岡遺跡、田小屋野貝塚で発
見された土器や土偶など数百点が
展示されている。建物周辺の大溜
池は、徳川幕府の「一国一城令」
で未完となった亀ヶ岡城の堀とし
て予定されていたものである。

【開館時間】9時～16時
※休館日…月曜日、祝日の翌日、
年末年始
【入館料】200円
【住所】青森県つがる市木造館岡
屏風山195
【問合せ】TEL0173 (45) 3450



■青森県立郷土館 (青森市)

総合博物館として青森県の自然、
歴史、文化などを紹介する常設展
示の他、期間ごとに内容が変わる
特別展示も行っている。

【開館時間】5月～10月9時～18時、
11月～4月9時～17時
※休館日…年末年始、館内整理
日
【入館料】3月～12月310円、1月
～2月250円
【所在地】青森県青森市本町二
丁目8-14
【問合せ】TEL017 (777) 1585



■つがる市森田歴史民俗 資料館

人面付深鉢形土器など、重要文
化財に指定された219点の土器・
土偶などを中心とした石神遺跡か
らの出土品を見ることができ。年
代順に並んだ円筒土器は圧巻で
ある。

【開館時間】9時～16時
※休館日…月・火・木・金曜日、年
末年始
【入館料】200円
【所在地】青森県つがる市森田
町森田月見野340-2
【問合せ】TEL0173 (26) 2201



2010年11月撮影、田小屋野貝塚
(写真提供/つがる市教育委員会)

いった日用の道具類のほか、
貝殻、魚や鳥、ほ乳類の骨な
どの「ゴミ」も多数発見され
ており、当時の生活の様子を
窺い知ることが出来る。
発掘調査の成果からベンケ
イガイの貝輪(ブレスレット)
の製作集落と考えられ、同時
代のベンケイ貝製貝輪が北海
道で出土した一方、田小屋野
貝塚から北海道産の黒曜石が
出土していることから、田小
屋野貝塚の縄文人たちは津軽
海峡を挟んで北海道の人々と
交易をしていたのではないかと
想定される。

円筒土器の 変遷伝える 石神遺跡

つがる市森田町
にある石神遺跡の
最大の特徴は、縄
文前期から中期に
かけての円筒土器

の型式が全て出揃っているこ
とだろう。ひとつの遺跡で円
筒土器文化の移り変わりを知
ることができるわけである。

出土した土器などのうち二
百十九点は、国の重要文化財
に指定されている。中でも人
面付深鉢形土器は、四方に歓
喜を表現した人面の飾りが付
けられた神秘的な造形美が見
る者の目を引きつける。

近年の発掘調査により、遺
跡北側では大量の円筒土器を
内包する竪穴住居、南側では
配石遺構や土坑墓などが発見
されており、遺跡の空間構成
や内容が明らかにされてつあ
る。

亀ヶ岡遺跡は江戸や明治、
そして現代に至るまで多くの
人々を魅了してきた。だが、

佐野忠史さんからメッセージ
つがる市の縄文遺跡から“いにしえ”
の風と、太古の英知を十分に感じてくだ
さい遺跡のあった場所で、縄文人の生
活に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。
(つがる市教育
委員会委員)



亀ヶ岡縄文 案内人

亀ヶ岡遺跡が我々の前に真
の姿を現すのはむしろこれか
らなのかもしれない。



石神遺跡出土の人面土器
(写真提供/つがる市教育委員会)

らく「謎多き遺跡」

とされてきた亀ヶ岡

遺跡の解明にむけた

第一歩となるのでは

ないかと期待されて



溜池の向こうに石神遺跡がある



国重要文化財石神遺跡出土品
(つがる市森田歴史民俗資料館所蔵
小川忠博氏撮影)

縄文時代のマスコット「しゃこちゃん」



は圧巻だ。



特に、木造

駅の駅舎にそびえ立つ巨

大「しゃこちゃん」の雄姿

精巧なレプリカをはじめ
として、掲示板からマンホ
ール、はては温泉の看板に
いたるまで、



町の各所で

その姿を発

見できる。



縄文土偶の代表
として知られる亀
ヶ岡の国重文遮光
器土偶。実物は東
京国立博物館に保
管されているが「地
元」木造では縄文住居展
示資料
館カル
コに展
示され
ている

十三湊

日本海屈指の
湊として
栄えた幻の都市
五所川原市
中世

謎に包まれていた青森県の中世。
それが遺構や遺物の相次ぐ発見によって
生き生きと現代に甦ってきました。
およそ600年前に
十三湖ほとりに広がっていた港湾都市十三湊。
訪ね歩けば、そのスケールの大きさや
中世の景観が色濃く残る姿に
きっと驚かされることでしょう。

〈お問い合わせ〉
五所川原市観光協会
TEL/0173-38-1515



からかわじょう
■唐川城跡(展望台)



りゅうこうじ はるひない
■龍興寺跡(春日内観音堂)



しゅうら
■市浦歴史民俗資料館



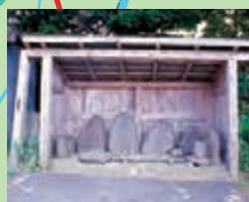
はま みょうじん
■浜の明神跡(湊神社)



とぎみなと
■十三湊遺跡



さんのうぼう ひえ
■山王坊遺跡(日吉神社)



れんげあん
■蓮華庵の板碑



ふくしまじょう
■福島城跡(内郭)

よみがえる 中世港湾都市



十三湊遺跡全景(写真提供/五所川原市教育委員会)



伝安藤盛季武者木像(所蔵/蓮華庵 写真提供/五所川原市教育委員会)

十三湖一带は、十三世紀から十五世紀前半にかけて豪族・安藤氏が支配し、大規模に整備された港湾施設や居城、宗教施設などを伴う大都市として栄えていた場所である。かつては大津波によって一瞬にして壊滅したという伝説が信じられていたが、平成三年に始まる発掘調査によってさまざまな遺構や遺物が見つかり、豊かな暮らしぶりや文化の高さが徐々に明らかになってきた。

津軽海峡を挟んだ北方世界を支配した。

最盛期を迎えるのは、十四世紀前半に起こった一族内部の跡目相続、蝦夷沙汰代官職を巡る争い(「津軽の大乱」)に勝利した安藤季久(宗季)が津軽西浜にある十三湊に拠点を移してからと考えられている。

**計画的に建設された
港湾都市十三湊遺跡**
十三湊遺跡の規模は南北約一・五キロメートル、東西五〇〇メートルの範囲で、現在の十三集落と後背地の畑全体に及ぶ。十三は、今は「ジュウサン」と読むが、江戸時代後期までは「とさ」と読んでいた。「とさ」の語源はアイ

又語の「ト・サム(湖沼のほとり)」であるという説が有力だが、定かではない。

十三湊遺跡ではかつて船舶が行き交っていた「前潟」沿いに船着場などの港湾施設が見つかっている。また、遺跡のほぼ中央、旧十三小学校の校庭沿いには東西方向に伸びる土塁と堀跡が現在も残されている。近年の研究では最盛期に都市領域の南限を区画する役割を果たしていたものと考えられている。なお、土塁北側にある旧十三小学校付近では領主、家臣クラスの屋敷跡も発見されている。

一方、土塁南側では、「古中道」の小路をもつ道路沿い(県道バイパス)に街区(町屋)の跡、十三湊南端の十三湖岸

沿いに中世寺院跡(伝檀林寺跡)が広がっていた。これら土塁南側で確認された遺構は、十三湊廃絶直前の時期であることも判明した。

遺構の保存状態も良く、中世港湾の景観を良く残していることから、平成十七年七月、十三湊遺跡は国史跡に指定された。

中世十三湊の世界

本州最北の十三湊は、南方からもたらされる陶磁器や米などとともに、北方の蝦夷ヶ島(北海道南部)からの海産物をも扱うターミナルとして栄えていた。室町時代までに成立した海商法規「廻船式目」には当時の全国の主要な湊が「三津七湊」として記載されているが、十三湊も博多などと並んでその一つに数えられている。こうした交易活動が、安藤氏の豊かな経済基盤とな



山王坊周辺出土の蔵骨器(写真提供/五所川原市教育委員会)



浜の明神から見た明神沼

中世北方世界の支配者安藤氏
安藤氏は鎌倉幕府執権の北条義時によって蝦夷沙汰代官に任命された、エミシ出身の在地豪族である。前九年の役で戦った北方の勇者安倍貞任の末裔を名乗り、室町時代には「日之本將軍」の称号を与えられて、

十三湊の船の出入り(水戸口)は現在の水戸口から南へ四キロメートルの場所(明神沼南端)で行われ、付近には船の安全を祈願するための「浜の明神」(現湊神社)が建設されていた。湊神社は、今も

十三湊コラム

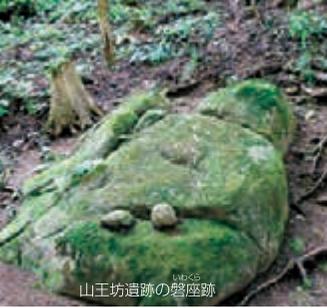
深浦町には南北朝時代の板碑(石製の卒塔婆)が集められた「関の古碑群」がある。碑の数は42基。この中には「安倍是阿」「安倍季□」の文字が刻まれたものもあり、安藤氏関連の供養塔といわれている。

【所在地】深浦町関字柝沢



関の古碑群

深浦町にある
安藤氏関連の史跡



山王坊遺跡の磐座跡



日吉神社境内に奉納された地蔵



日吉神社の山王鳥居。最上部に笠木のある二重鳥居は近隣になく珍しい



福島城内郭の門跡(復元)



福島城跡全景
(写真提供/五所川原市教育委員会)



福島城跡外郭の堀跡

十三湊コラム

さまざまな伝説が語られる



もや やま
霧山

連峰をなさず、美しい紡錘型で単独で存在する霧山は、古来より人々の信仰を集め、さまざまな伝説が語られてきた。岩木山と互いに高さを競いあったという説や、安寿と厨子王がそれぞれ逃げ込んだという説、岩木山と姉妹だという説があり、毎年旧暦8月1日にはともに「お山参詣」が行われている。

宗教施設 山王坊遺跡

十三湖北の山王坊川が流れる沢筋、日吉神社境内地には山王坊遺跡がある。こ

調査で内郭南東部から中世の武家屋敷が見つかり、安藤氏の居城であることが明らかになった。内郭では、門跡が復元され、土塁や堀跡が残る。一方、外郭では土塁や堀跡、門跡を巡る遊歩道が整備されている。

これは安藤氏が庇護したとされる神仏習合の宗教施設が発見されている。伝承によれば、中世の十三湖周辺には「十三千坊」と呼ばれる多数の神社仏閣があり、山王坊遺跡には「阿吽寺」があったと伝えられている。そのほか十三湖北岸には禅林寺跡(露草遺跡)、龍興寺跡(現春日内観音堂)も中世の宗教施設であったと考えられている。また山王坊一帯からは五

安藤氏の居城 福島城跡

十三湖北岸の丘陵には、二重の構造を持つ福島城跡がある。内郭は一辺が二百メートル四方の方形、外郭は一辺が約一キロメートルの三角形であり、広大な面積を誇っている。

これまで福島城は、いつ、どのような目的で作られた施設か分からず謎に包まれていたが、平成十七年から二十一年にかけて青森県による発掘

「出船入船の明神」として漁業関係者に信仰されている。

中の島に向かって歩道橋を歩けば、右手に十三湊遺跡や岩木山など、左手に唐川城跡や中山山脈などを望むことができます。橋の上から広大な景色とともに、中世の歴史ロマンを感じてみませんか。
(小山内文明さん)

安藤の郷応援隊ガイド



湊神社(浜の明神跡)



浜の明神跡





2001年度の唐川城発掘調査の様子
(写真提供/五所川原市教育委員会)



唐川城遠景(写真提供/五所川原市教育委員会)



唐川城跡(展望台)

安藤の郷 応援隊



十三湊ふれあい GUIDE

五所川原市には地元有志によって結成されたボランティアガイドの団体があり、十三湊遺跡をはじめ十三湖周辺の史跡の案内を行っている。見どころを効率よく回れて、発掘の最新情報なども学べるのでおすすめ。

【案内期間】4～10月
【案内時間】9時～16時
【料金】ガイド料1,000円(人数の多少に関わらず)、資料代500円(入館料、入館料等実費【問合せ】五所川原市観光協会
TEL0173(38)1515
道の駅十三湖高原
TEL0173(62)3556



平安時代(12世紀)の金銅鍍金具
市浦歴史民俗資料館にて展示(写真提供/五所川原市教育委員会)

なぜか安藤氏が去った後の十三湊を南部氏が顧みることにはなかつた。十三湖砂州に再び人が住み始め現在の集落の基礎ができるのはそれから一世紀後のことであるが、その間十三湊は砂で埋まり、幻の都市になっていったのである。

【参考文献・資料】
『青森県の歴史散歩』山川出版社発行 青森県高等学校地方史研究会編
『国史跡十三湊遺跡 五所川原市・市浦地区文化財ガイドブック』十三湊サポーターズガイド発行



柴崎城跡(写真提供/中泊町水産観光課)



奈良時代(8世紀)の銅製押出菩薩坐像
市浦歴史民俗資料館にて展示
(写真提供/五所川原市教育委員会)



平安～鎌倉時代(12、13世紀)の
金銅観音菩薩坐像 慇仏
市浦歴史民俗資料館にて展示
(写真提供/五所川原市教育委員会)

野を見渡すことができ、天気
のよい日には岩木山を望むこ
ともできる。
唐川城跡の遺構は展望台北
側の崖の上にある。唐川城は
これまで南部氏に追われた安
藤氏が最後に立てこもった詰
城だと伝えられていたが、発
掘調査によって、平安時代後
期(十世紀後半～十一世紀)
に建設された高地性環濠集落
跡であることが判明した。た
だし平坦部の一部は安藤氏の
時代にも再利用されており、
小規模な掘立柱建物が伴う皆
のような施設があったと考え

中世十三湊の衰退

十三湊の繁栄は、十五世紀半ば、急速に台頭してきた南部氏との戦いに安藤氏が敗北したことによって終わりを告げた。

南部氏に攻められた安藤氏は一時柴崎城(中泊町)に逃れた後、蝦夷ヶ島へと落ち伸びていった。その後何度も津軽奪回を試みるが叶わず、安藤氏はやがて、秋田方面へと拠点を移してい



蓮華庵にある山王坊一帯から出土した板碑(写真提供/五所川原市教育委員会)



龍興寺跡(春日内観音堂)

十三湖や 津軽平野を一望 唐川城跡

春日内観音堂の
祠の横の参道を登
つていくと唐川城
跡展望台に至る。
ここからは十三湖
や日本海、津軽平
野を見渡すことができ、天気
のよい日には岩木山を望むこ
ともできる。
唐川城跡の遺構は展望台北
側の崖の上にある。唐川城は
これまで南部氏に追われた安
藤氏が最後に立てこもった詰
城だと伝えられていたが、発
掘調査によって、平安時代後
期(十世紀後半～十一世紀)
に建設された高地性環濠集落
跡であることが判明した。た
だし平坦部の一部は安藤氏の
時代にも再利用されており、
小規模な掘立柱建物が伴う皆
のような施設があったと考え



市浦歴史民俗資料館

十三湊遺跡からの出土品や安藤氏関連の史料を展示し、日本中世社会における「北の文化」を紹介している。

【開館時間】9時～16時30分
※休館日…冬期間(12月1日～3月31日)
【入館料】一般300円、大学生200円、高校生以下150円
【所在地】五所川原市十三土佐1-298
(十三湖・中の島)
【問合せ】TEL0173(62)2775